

少人数学級編制 「わかる授業」「楽しい学校」を目指した指導

舟形市立舟形小学校

1 本校の実態

本校は、舟形・長沢・富長・堀内の4つの地域にあった小学校が平成25年に統合、町唯一の新生「舟形小学校」としてスタートし、本年度で9年目となる。学校目標は、「夢や希望を持ち 共に学び合う 心豊かな子どもの育成」である。

統合当初は280名を超え14学級あったが、児童数の急激な減少により、現在は9学級（普通学級7、特別支援学級2）、全校児童は199名となっている。令和3年度は、2学年が標準法改正により2クラスとなっているが、その他の学年は30人を超える学年1クラスとなっている。そのうち、本校で最も多人数学級である6年生に非常勤講師1名が配置された。

30人を超える単学級となると、担任だけでは子どもたち一人ひとりの丁寧な見取りと指導・支援が難しくなり、必然的に学習内容の理解や定着に時間がかかる児童も出てしまう可能性がある。また、実態にあわせた支援の仕方も多種多様となってくるため、担任の負担がさらに大きくなる。

そこで、本事業を活用し、担任と少人数指導教員が緊密な連携を図りながら丁寧な指導を行い、子どもたちが「授業がわかる」「学校が楽しい」と思えるよう工夫を行ってきた。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① TT指導を基本とし、つまずきや一人ひとりの特性に応じて丁寧な指導を行っていくことで、更なる定着を図る。また、学習内容に合わせて重点を決め、個別やグループ学習等も取り入れるなどして、一人ひとりの実態に合わせて学習を進めるようにする。
- ② 担任と少人数指導教員が常に情報交換等を行い、その子に合った声かけや励まし等を行うことで、円滑な人間関係や集団を醸成し、安心感と落ち着きのある学級経営に結びつけるようにする。
- ③ 本校で重点教科としている算数科の系統性を重視しながら指導することで、児童の理解や技能を高めるようにするとともに、教員の学習指導力の向上も図る。

(2) 具体的な取組み事例

① きめ細かなTTによる指導

少人数指導教員は5～6年生の指導にTTとして入っている。5年生には算数の全時間、6年生には国・社・算・英・音・総の時間に入り、指導にあたっている。

少人数指導教員は、勤務時間が限られているため、授業の終わりまたは朝の段階に次時の打ち合わせ等を行い、授業の重点を決めるようにしている。

学級担任が一斉指導を進める場面は、少人数指導教員が後部で一人ひとりの学びを見取るようにし、全体の中で子どもたちの幅広い意見を取り上げたり、つまずきに対して補足説明や支援を行ったりして、理解が深まるようにしている。単元構成

や学習内容によっては、T1とT2が入れ替わり、担任が個別指導にまわるなど役割分担しながら指導を行っている。

グループ学習の場面では、子どもたち同士の関わりを大事にしながら、グループを分担して学び方を支援している。興味別や習熟度に合わせた指導など、教材や単元の特性に合わせて指導形態を意図的に変更する手立てもとっている。

複数の教員で授業を行い、個々の考えや定着度を細やかに把握しやすくなったことで、子どもたちの意見を取り上げやすくなり、子どもたちの学習意欲の向上にもつながってきている。

② 情報共有と児童理解

学級経営の基本は、児童理解である。少人数指導教員は昨年からの継続配置であるため、児童一人ひとりを十分に理解し、温かな声かけや励まし等を行っている。子どもたちの学習や生活においてちょっとした変化が出た場合も、担任と手分けしてすぐに話を聴くなどの対応をとり、情報共有の機会を随時持つようにしている。

また、個の実態に合わせて指導の方向性を決め、家庭学習を作成・準備するなど臨機応変に調整するようにしている。

③ 系統性を重視した指導

本校に配置された非常勤講師は、算数など単元の系統性を熟知している。打ち合わせの中で、「こういうふうに授業を行いたい」という担任団の要望を聞き、大事にしなければならない系統的な考え方等を織り交ぜながら、授業の組み方について相談に乗ったりアドバイスをしたりしている。また、相談した方向性に基づいて学習の中で使うプリントを準備したり、授業とのつながりを大切にした家庭学習プリントを作成したりするなど、より定着するようフォローアップも行っている。

全国学力・学習状況調査の結果において、本校の落ち込みが見られる問題について校内研修でも取り上げた。その際、問題を解くための力とその力を育てるための学年を越えたつながりなどについて意見交換し、学校全体で共有し改善に向かって取り組むことができた。

3 成果（○）と課題（△）

○ 本校と舟形中学校で連携して行っている「魅力ある学校づくり」事業で重点としているのが、「学校が楽しい」「授業がよく分かる」の2項目である。12月調査では「学校が楽しい」という設問に対して「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答したのは、5年生で90.3%、6年生で91.4%であった。これは適切な指導・支援により、学級集団として分け隔てなく関わり合いながら落ち着いて生活することができているためであると考えられる。同様に「授業がよく分かる」と回答したのは、5年生で87.0%、6年生で94.3%であった。学習に対する意欲が前面に見られるようになり、定着度も向上してきている。これらは、学校で目指している数値におおむね達していると考えている。

△ 子どもたちの資質・能力の育成のために、少人数指導教員の活用方法にさらに改善を加え、一人ひとりのよりよい学びを目指していく。

△ 少人数指導教員の勤務時間は1日6時間であるため、6時限目の授業に出ることができなかった。勤務の延長が可能であれば、より一層効果が高まると感じる。

少人数学級編制 子ども主体の価値ある学びの充実

米沢市立上郷小学校

1 本校の実態

本校は、全校児童 202 名、学級数 8（うち特別支援学級 2）で、各学年単学級となっている。全ての学級が 30 名以上で、そのうち 3 年 35 名、5 年 34 名、6 年 34 名となっており、さんさんプランによる少人数指導教員（非常勤講師）が 2 名配置された。

本校では、平成 31 年度から「愉しいくらしづくりを足場に据えた子ども主体の価値ある学び」づくりの研究に取り組んできた。3 年次となる今年度の当初には、一人ひとりに、自分事として主体的に学びに向かわせるにはどうすればよいのか、そしてどうすれば確かな学力につなげることができるのかが、大きな課題となっていた。

そこで、本校で目指す資質・能力を明確にしたうえで、コロナ禍の中、子ども主体の価値ある学びに、一人ひとりが自分事として取り組む場を保障し、確かな学力をつけるための支援に取り組んでいくことにした。

2 実践

(1) 運用の方針

以下の 2 つを達成するために運用していく。

- ① 自分たちで生活を創る活動を支援し、自尊感情の醸成を図り、良好な人間関係の構築と学びに向かう態度を育成する。
- ② 個々の児童の学びが主体的なものになるように支援することで、学習意欲の向上と学力の向上を図る。

<主な取組み>

- ・ 3 学年には、算数、外国語、理科、総合的な学習の時間で配置し、チームティーチングで支援する。
- ・ 5・6 学年には、算数を中心に配置し、チームティーチングで支援する。
- ・ 課題に応じたグループ学習や理解度に合わせた個別の学習などの支援ができるように、学習活動に合わせて支援体制を組んでいく。
- ・ それぞれの児童の実態や課題に応じて学習活動が行えるような「単元づくり」や「くらしづくり」を行う。

<支援にあたって>

- ・ 複数教員の目で課題、成果を見取り、承認や問いかけ等を行い、主体的な学びになるように支援する。
- ・ 個々の特性や学びの状況等を担任と共有しながら、興味や実態に応じた次の支援を計画・実践する。
- ・ 能力差や意欲差などの個の実態に応じたきめ細かな支援をする。

(2) 具体的な取組み

- ① 自尊感情の醸成、良好な人間関係の構築、学びに向かう態度の育成に向けて
 - ・ 授業における子ども主体の追究のための支援
 - 生活科や総合的な学習の時間では、課題解決に必要な活動を自分で決定し、主体的に活動が行えるようにチームティーチングで支援した。グループ内での役割が

果たせるように支援したり、他の活動とつなげる声掛けを行ったりしながら、個々の活動が全員で一つの課題を解決することにつながったという達成感を持たせることができた。また、教員がともに活動し、相手を認めたり、考えをつないだりする姿をモデルになって見せていくことで、良好な人間関係の築き方に気付いたり、主体的な学び方を身に付けたりすることにつながった。

・「愉しいくらしづくり」のための支援

自分たちの学校生活を愉しくするために、様々な活動に取り組んだ。花壇づくり、1年生を楽しませる会、ダンス創作バトル（運動会）、歩いて絆を深めよう（縦割り班ウォークラリー）など、全ての子どもが、個々の能力を生かして力が発揮できるように、チームティーチングにより多様な活動を保障した。個々の特性や気付きの段階に合わせて担任と情報を共有しながら、アドバイスをしたり、励ましや称賛をしたり、次の活動への方向性を話し合ったりと、きめ細かな支援を行った。自分たちで活動を創りあげる中で、自信を高め、友達と支え合う人間関係の構築、新たなことに挑戦する意欲などにつながった。

② 学習意欲の向上、学力向上に向けて

・チームティーチングによる見取りと支援

課題や適用題、小テスト等を細やかに点検し、できないことができるようになるまで個別に繰り返し支援した。担任と連携し、励ましや称賛をすることで、できるようになったことを自覚し、次の学習への意欲につなげることができた。

児童の学びの実態を共有し、その時間の支援の見直し、次の時間の支援の確認を行い、確かな学力につながるよう取り組んだ。

5・6年生では、学級を2つのグループに分け、1グループを非常勤講師の指導で家庭科の調理実習を行い、並行してもう1グループは担任により理科の実験を行い、次の時間は、交替して同様の学習を行うという方法をとった。少人数の学習により、教具や実際に活動できる場を保障しながら、一人ひとりが主体的に取り組める環境を設定することができた。



3 成果（○）と課題（△）

- チームティーチングで、課題解決の活動に入り、相手を認めたり、考えをつないだりする姿をモデルになって見せていくことで、児童が良好な人間関係の築き方に気付いたり、主体的に学ぶ方法を身に付けたりすることにつながった。
- 児童ができるようになった自分を自覚することで、自信を高め、新たなことに挑戦する意欲や次の学習の意欲につながった。
- 実習や演習、実験など学級を半分にして授業を行うことで、密を回避するだけでなく、一人ひとりの役割を理解し、自分事として学習する場の保障につながった。
- △ 資質・能力を育成するための授業改善に向けて、研修や打ち合わせ、教育相談会議等は資料や会議録で共有した。今後は、今まで以上に一人ひとりの学びの様子を共有できるように校務支援システムの活用を継続したり、研修や打ち合わせに参加したりできるように時間調整等を検討していきたい。

特別支援学級 学級編制基準引き下げ 人的配置による個別最適化と働き方改革の推進

庄内町立余目中学校

1 本校の実態

本校は全校生徒 448 名、通常学級は各学年 5 学級、特別支援学級在籍生徒数は 19 名の 6 学級である。知的障がい学級 8 名、自閉症・情緒障がい学級 8 名、病弱学級 2 名、肢体不自由学級 1 名で、3 年生 8 名、2 年生 5 名、1 年生 6 名の構成となっている。

特別支援学級 19 名の中には、中学校卒業後に普通高校進学を希望している生徒、高等養護学校を希望している生徒、養護学校を希望している生徒など様々である。

また、中学校入学前の進路等教育相談において特別支援学校中等部が適すと判断されたが、地域の中で地域の子ども達と一緒に学びたいという希望から本校に入学した生徒もおり、一人ひとりがかつ力はそれぞれ様々である。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 生徒と教員の安全確保を第一に考える。
- ② 中学校卒業後の進路を見据え、可能な限りその生徒に適した通常学級との交流を仕組む。
- ③ 教員の過重な負担にならないように留意し、「さんさん」プランの編制基準引き下げと町特別支援学級講師の配置を生かす。

(2) 具体的な取組み事例

① 知的障がい学級での実践

「さんさん」プランの特別支援学級の編制基準引き下げによって、知的障がい学級 8 名を以下のように学級編制した。

知的空 1 組・・・1 年生 3 名と 2 年生 2 名、計 5 名を 1 人の教諭と町特別支援学級講師が担当する。

知的空 2 組・・・3 年生 3 名を 1 人の教諭が担当する。

この編制によって、知的空 2 組は 3 年生だけの学級になり、知的空 2 組の担任は進路指導に専念することができている。特に進路業務はミスがないように進めなければならないため、教員の負担を軽減できる。

また、知的空 1 組はまだ中学校に慣れていない 1 年生を町特別支援講師がサポートしながら担任の教諭が指導することができている。この 5 名の生徒、一人ひとりの力にあった学習をしやすい環境になっている。また、てんかんの生徒の容体が急変しても、複数教員で授業する体制をつくり、安全を確保しやすいということが最大の良さである。

② 自閉症・情緒障がい学級での実践

「さんさん」プランの特別支援学級の編制基準引き下げによって、自閉症・情緒障がい学級 8 名を以下のように学級編制した。

自閉症情緒空 6 組・・・1 年生 2 名と 2 年生 3 名、計 5 名を 1 人の教諭と町特別支援学級講師 2 名が担当。

自閉症情緒空 5 組・・・3 年生 3 名を 1 人の教諭と町特別支援学級講師 1 名が担当。
この編制によって、5 組は 3 年生だけの学級になり、5 組の担任は進路指導に専念できる。

また、6 組は知的と同様に 1 年生を町特別支援講師 1 名がサポートしながら担任の教諭が指導することができている。情緒が不安定になることが多い生徒へ対応するために、2 年生 3 名にも町特別支援学級講師 1 名を配置していただいている。

情緒学級の 8 名は、通常学級と交流する教科が多い。普通高校を希望する生徒が多いため、通常学級との交流によって人との関わりを学びながら、授業を受けることは、高校のことを考えると非常に重要である。しかし、気持ちが不安定になることも多いため、「さんさん」プランによる学級編制基準引き下げと、町からの人的配置は大変ありがたく、このことによって交流する授業に教員が寄りそって支援したり、クールダウンしなければならない状況の時に安全を確保しながら個別学習に切り替えたりすることが可能になっている。

3 成果（○）と課題（△）

- 「さんさん」プランの学級編制基準引き下げと、町特別支援学級講師の配置のおかげで、特別支援学級を担当する教員を 12 名にすることができた。このことによって、何よりも生徒と教員の安全を確保できることが最大の成果である。生徒が倒れた時に適切な対応をしやすく、生徒の安全を守ることができる。特別支援学級は様々な生徒がいることから、編制基準を引き下げて担任する生徒数を少人数にできる施策は生徒の安全を守りやすい。
- 中学時代は特別支援学級に在籍していても、高校や社会に出た時に様々な人とコミュニケーションをとることが出来なければ困ることが多いであろう。人的配置があることによって特別支援学級在籍生徒の通常学級生徒との授業交流が可能になり、特別支援学級の生徒の社会性を育成し、多くの生徒と一緒に学ぶ力を育成することができている。また、人的配置があることによって、特別支援学級の生徒を学級数以上に少人数の学習グループに組み直して個別に授業することができ、19 名の生徒の力を伸ばしやすい環境をつくることができている。
- 様々な個性と力をもつ生徒を担当する教員の立場になった場合にも、学級編制基準の引き下げは、教員の負担を軽減する。担当する生徒数を減らすことで、教員の業務量を減らし、心身の健康を保ちやすいため、「さんさん」プランは教員の働き方改革にもつながっていると考える。
- △ 特別支援学級在籍者が 19 名ともなると、時間割編成も複雑なうえ、日常の授業での人の配置について割り振りをする教務的な業務が莫大になる。特に近年はインクルーシブ教育が叫ばれる中、地域の中で一緒に学ばせたいという保護者の希望も増し、特別支援学校よりも地元の中学校を選択するケースも増えている。特別支援学級在籍者がある程度の人数を超えたら、当該校に主幹教諭を置くなどの施策があれば、さらに当該校の教員の業務負担が減り、働き方改革につながると思われる。

本校は通常学級においても「さんさん」プランによって 1 学級が 33 人以下になっている。生徒の学びが個別最適化なものになるため、また教員の心身の健康のために、“教育山形「さんさん」プラン”は効果的な施策だと考える。是非、現場にあった「さんさん」プランの充実を今後もお願いしたい。

小学校低学年副担任制 個をしっかりと見取り、力を伸ばす指導の在り方

南陽市立宮内小学校

1 本校の実態

本校は、児童数 311 名、学級数は特別支援 4 学級を含む 15 学級である。年を追うごとに児童数が減少し、今年度は 1 年生が 35 人で単学級となったため、副担任として非常勤講師が配置された。

35 人の児童を指導するにあたって、教室の机の配置を工夫したり、サブ教室を設置したりするなどの準備を前年度から進めた。

1 年生の児童は、好奇心が旺盛で、授業にも意欲的に臨み学びを深めている。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 担任と副担任の役割を明確にして指導にあたることで、児童一人ひとりの学習や生活における困り感に適切に対応していく。
- ② 学習活動の内容によって、児童を 2 グループに分けて授業を行い、児童の進捗や理解力に対応したきめ細かな支援をしていく。

(2) 具体的な取組み事例

① 提出物（音読カード、宿題）の確認や見取り

登校後、児童は音読カードや連絡帳、宿題を教室前の提出物入れに出すことになっており、副担任は、朝の時間に提出物の確認を行っている。特に、音読カードには、検温の記載もあるため、確実にチェックするようにしている。また、連絡帳に保護者からの連絡がある場合は、まとめて担任に渡し、担任が速やかに内容を把握して、一人ひとりに応じた返事を書くことができるようにしている。

宿題についても、副担任が点検を行い、児童は漢字や計算などの間違いがあったところをその日のうちに直すことができる。朝の時間帯で確認ができることで、授業の中で宿題の問題を効果的に活用したり、つまづいた箇所を重点的に指導したりしている。

また、担任は登校してくる児童に声をかけたり、話を聞いたりする時間をもつことができ、朝の短い時間ではあるが、児童理解のための大切な時間になっている。



② 学習中や学校生活における役割分担と支援

基本的に担任が授業を進め、副担任は T 2 という立場で、支援の必要な児童について支援するようにした。

また、課題を出して、授業中に確認が必要なものについては、二人で丸付けにあたることで、間違い直しも徹底させることができた。特に、算数の習熟問題では、プリントに取り組みさせる中で、できた児童から半分の人数をサブ教室へ移動させ、



副担任が続きのプリントの丸付けの対応をした。習熟度別に2クラスに分けることになるので、担任が算数に苦手意識のある児童を中心に指導することでき、個別の対応も充実することができた。

さらに、35人学級での鍵盤ハーモニカの指導における見取りが難しかったため、クラスの人数を半数に分けてA、B班を作り、担任と副担任が交互に指導することによって複数の目と耳によって評価することができた。その結果、鍵盤ハーモニカに苦手意識を持つ児童にもかかわることができ、技術の上達とともに意欲の高まりにもつながった。

給食の時間は、感染対策のためにサブ教室も使い、児童を半数に分けて給食指導を行った。教室の隣に空き教室を確保して机と椅子をクラスの人数の半数分配置していることが、様々な活動をしていく上で、効果的であると感じる。

③ 児童とのかかわりの充実

休み時間も複数の目で児童の様子を見ることができ、ちょっとしたトラブルにも、機会を逃さずに対応し、児童に関わることができた。特に、余裕を持って児童の声に耳を傾け、児童の心に寄り添って支援することができた。また、座席表に毎日気がついたことを記録し、放課後に情報交換してきた。それを基に翌日の指導に活かしたり、家庭と連絡をとったりするなど、効果的に活用することができた。

3 成果（○）と課題（△）

- 年度当初の35人から、転入生が入り36人となったが、TTとしての支援以外にも、様々な点検作業、下校指導や給食準備など多方面にわたって副担任が積極的にかかわることで、担任の負担軽減につながり、余裕を持って児童の様子を見たり、指導したりすることができた。
- 学習においては、個別の適切な支援を行うことで、低位の児童が安心して学ぶ姿が見られ、学力の向上にもつながっている。
- 複数の目で児童を見て情報交換していくことで、児童一人ひとりの見方が広がり、確かな児童理解をもとにコミュニケーションをとったり、家庭とのスムーズな連携を図ったりすることができた。このことが、児童にとって安心して過ごせる環境作りにつながった。
- △ 副担任の勤務時間が15時までとなっており、打ち合わせの時間を十分に確保することが難しかった。

**中学校別室学習指導教員
個に応じた学びを保障し、心の居場所をつくり、
教室復帰につなぐ指導の充実**

山辺町立山辺中学校

1 本校の実態

本校は今年創立 60 周年を迎えた町内唯一の中学校である。本年度から「作谷沢中学校」と統合し、新生「山辺中学校」として新たなスタートを切った。

学区は山辺小学校・相模小学校の二小学校区からなり、17 学級（特別支援学級 3）、全校生 411 名、教職員 43 名の学校である。学校教育目標「いのちを大切にし、絆を深め、学び続ける生徒の育成」を目指し、取組みを続けている。

今年度の不登校生徒、不適應の生徒は 30 名近くであった。不登校や不適應の原因は家庭環境や友人関係、学習意欲の低下など多様化しており、一律の指導では対応できなくなっている。不適應の生徒は、ある教科は在籍学級で授業を受け、特定の教科は別室で受ける、午前中登校して別室で過ごし午後には帰る、またはその逆など、学校生活での過ごし方も多様化している。教室復帰に向けたウォーミングアップとして別室を利用し、別室での学習で自信をつけ、満を持して教室復帰を目指す生徒もいる。別室を利用した、それぞれにとっての個別最適な学びを尊重しながら、教室復帰に向けて指導している。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 教室に入ることが困難な生徒の心の居場所を確保し、安心して登校できる環境をつくる。
- ② 教室で授業を受けることが困難な生徒でも、校内に学習環境を提供し、教室復帰に向けての学習意欲の持続化と学習習慣の定着を目指す。
- ③ 個に応じた学びを重視し、教員と保護者、教員と生徒が相談しながら学習を進めていく。

(2) 具体的な取組み事例

① 校内体制の充実

毎週月曜日に教育相談委員会を行い、不登校や不適應の生徒の定期的で継続的な話し合いの場と位置づけ、情報交換と共通理解の場とした。また、会には別室学習指導教員の見取りと考えが反映できるようにした。例えば、特に心配される生徒が現れた時には、さらに具体的な取組みを行うためのケース会議を設け、学年主任、学級担任、別室学習指導教員が話し合えるようにした。

教育相談委員会には、町の教育委員会から教育指導専門員を毎回派遣していただき、学校と教育委員会の共通理解を図っている。専門員から学校への具体的な指導や、学校から教育委員会への要望などを通して、教育委員会と学校が一貫した姿勢で取り組み、課題の解決に努めている。

② 生徒の多様化した問題への対応

それぞれの生徒が様々な悩みを抱えている。その解決のために別室学習指導教員は生徒と向き合い、時間を共有してきた。生徒への寄り添いを徹底し、その時間に比例して、生徒と信頼関係を築くことができた。

また、発達上の課題を抱えて教室に入ることができず、指導が困難な生徒には、学年で空き時間の教員を1時間ごとに配置し、別室学習指導教員と協力しながら指導にあたった。クールダウンが必要な時も、信頼関係を基にして生徒を落ち着かせ、家庭と連絡を取り合いながら適切な対応をとることができた。

③ 教室復帰を望む生徒への学習支援

生徒にはケース会議等を利用して、長期、中期、短期の指導目標を立てている。その指導目標に合わせて、学習支援のあり方を検討してきた。自分の将来を見通した時に、教室に入れたい現状から脱したいと願う生徒は、復帰のために別室への入室を希望する傾向にある。別室は自分のペースで学習に取り組むことができるとともに、学習のつまずきについても解決することができる。別室学習指導教員は教員免許を持っているため、自分の専門教科について専門的な指導を行うことができ、生徒達も意欲を持って学習に取り組むことができた。また、学年によっては、空き時間の教員を別室に配置したことも、教科の学習に十分対応することができた大きな要因となった。別室への登校を決めた生徒に、温かさや包容力、安心感を提供し、次のステージに立つ勇気を送る環境は、まさに心の居場所となっている。

3 成果（○）と課題（△）

- 教室に入れたい生徒の中には、自宅での生活も安定しない精神的に不安定な生徒もいるため、大切な心の居場所となっている。
- 教育相談委員会が機能して学年と別室をつないでいるが、別室学習指導教員は担任と生徒をつなぐ役割を果たしており、取組みが安定する要因となっている。
- 生徒は別室学習指導教員を信頼し、「学校に行けば待っていてくれる人」という存在になっており、教室復帰のエネルギーが満たされつつあることが、日々感じられた。学習意欲が少しずつわいたり、短い時間でも継続して学習できたりして、より効果的な学習支援が行われた。
- 集団での活動ができない生徒でも、別室学習指導教員からの声かけによって心の安定が図られた。クールダウンの場としても別室が機能した。
- △ 別室があっても、指導の基本は担任と学年が担うことになる。特別な事情がある時は、別室学習指導教員に頼らざるを得ない場合もあるが、頼りすぎでは効果が長続きしない。担任や学年が別室学習指導教員に頼りすぎ、任せきりになる場面もあった。話し合うことで改善したが、双方のコミュニケーションを大切にしていきたい。
- △ 別室学習指導教員が、勤務時間外に家庭と連絡を取り合ったり、生徒と活動したりしなければならないことがあった。生徒と時間外業務の板挟みになってしまったため、別室学習指導教員と学年との連携をより一層図ることで、適正な勤務体制が保障されるように改善していきたい。

教育マイスター制度 小学校教育マイスター 確かな学力の育成に向けた授業改善及びOJTの充実

新庄市立新庄小学校

1 本校の実態

令和3年度で創立148年目を迎える本校は、新庄市の行政・文化等の中心地に立地し、16学級（特別支援学級4学級を含む）、326名の児童が在籍している。「あいさつ・そうじ・歌声」を学校の自慢として位置付け、日々の教育活動に当たっている。

本校はこれまで、学習の中の「かかわり（友達と・教材と）」を大切にした授業づくりを行い、外部講師による定期的な評価と、新たな課題発見を繰り返し行ってきた。取組みの成果として、全国学力・学習状況調査、県学力等調査等では良好な結果が続いているが、探究的な思考や表現力を問われる問題には課題がある。日々の授業を、単純な記憶作業として終えるのではなく、剥がれ落ちない確かな学力として身に付けていく過程に変えていくことが必要となっている。また、本校の学校規模や最上地区の現状から、ここ数年間、新採教員の配置が続き、教職10年以下の若手教員の割合が高まっているため、若手教員の授業力・指導力の向上が急務の課題となっている。

教育マイスター制度を活用し、この2つの課題を中心に改善と充実を図った。

2 実践

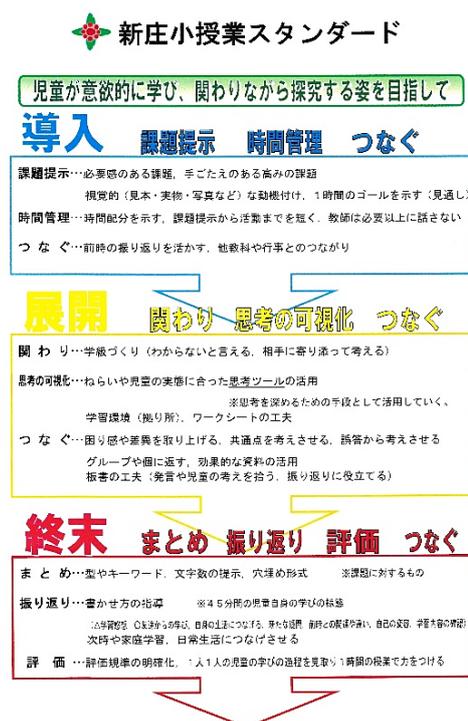
(1) 運用の方針

- ① 県が推進する探究型学習を基に「新庄小授業スタンダード」を作成し、目指す授業像を共有することで学力が高まること。
- ② 魅力ある単元構成や必要感のある課題設定を考え、児童が単元や本時の課題を自分事と捉え、主体的・協働的に学習に取り組めるようになること。
- ③ 定期的な国語・算数のテストや単元末テストの内容を工夫し、基礎・活用の力が高まること。

(2) 具体的な取組み事例

- ① 「新庄小授業スタンダード」の作成
児童が夢中になる授業づくりを目指し、探究型学習を、全教員が例外なく実践できるようにすることが目的である。1年次からこの授業スタンダードに沿った授業を受け続けることで、学び方についても確立されていき、かかわり方についても、学年が上がるにつれスムーズに行うことができている。今年度は特に、導入時の、児童の意欲を大切にしたい課題の工夫と、終末の、まとめや振り返りの書かせ方について重点を置き、校内研究を進めている。

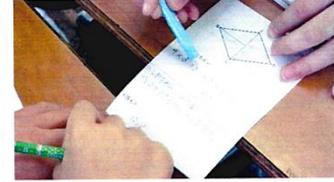
- ② 研修会・授業研の還元と活用
教育にかかわる知識・情報の更新と、全教員が同じ方向で校内研究の推進を図ることが



目的である。教育マイスター研修内で学んだことのポイントや、授業研から学ばせていただいたこと、これからの授業づくりに向けてなど、教育マイスターの視点で情報を提供してきた。

授業研については、「新庄小授業スタンダード」と照らしながら還元することで、授業像の共有にもつながった。また、付きたい力に焦点化して授業を参観し、課題や学習活動、時間管理や評価の在り方について改善点や考えるポイントをマイスター通信で示すことで、授業者だけではなく、全教員の授業づくりに活用できるようにした。

グループでの学び方や既習事項の活かしなど、とても自然にできていました。また、積極的に説明しようとする姿も見られ、鍛えられていると感じました。「何を、何で説明させたい」という学習のゴールから逆算して、全体交流等で押さえない用語や考え方、納得感と、学習のどこで出会うのかを考えると、より書けるようになると思います。



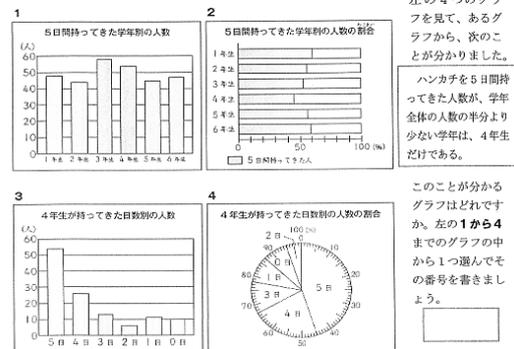
③ 単元末評価シートの作成と実施

付きたい力の把握、指導と評価の一体化を意識したPDCAのサイクルを循環させることが目的である。全国学力・学習状況調査、県学力等調査を基に、OJT支援員(退職型教育マイスターとして平成28年度から勤務)が中心となって作成・実施している。帯時間として設定しているパワーアップタイム(毎日15分間)を活用し、つまずきの共有や、シート作成の改善に活かしている。限られた時間ではあるが、即時フィードバックを図れること、徐々に積み上げられることなど、利点も多い。

第6学年 3学期 単元「資料の持ちようを調べよう」評価シート

名前 _____

- ① ひろしくんの学校では、保健委員会で全学年の児童のハンカチを持ってきた人数調べを5日間行いました。その結果を下の4つのグラフに表しました。(参考:1127組習字A)



④ 教職5年以内研の企画・実施

若手教員(教職5年以内:5名)の授業力育成、特に算数科の授業の力を付けることが目的である。この取り組みは、最上広域市町村圏事務組合教育研究センター主催事業を活用させていただいた。全教員を対象に授業を公開し、指導主幹より直接ご指導をいただいた。放課後は若手が自主的に研修会を実施し、指導を受けたことや、児童の学びの様子を通して話し合い、今後の授業づくりについてイメージを共有した。



3 成果(○)と課題(△)

- 全教員が例外なく、同一視点・同一歩調で授業づくりや校内研を進めることで、一貫した授業スタイルの確立と、教職年数によらない授業の質を維持することができた。
- 児童に直結する取り組みは、日常の教育活動の中に溶け込み、特別感のない形で進めることができた。
- どの実践においても「児童に付きたい力は何か」を明確にすることで、探究的な思考や表現力の高まりを感じられたことに合わせ、児童の力の不十分さも知ることができ、指導と評価の一体化を深めることができた。
- △ 授業づくりの意識や児童の学力の様子等を、より具体的な数字で評価・振り返る場面を設定し、続けてきた実践のブラッシュアップを試みていくことが必要である。

教育マイスター制度 小学校教育マイスター 授業改善による若手教員の指導力向上

酒田市立亀ヶ崎小学校

1 本校の実態

本校は、平成 26 年度に旧亀城小学校と旧港南小学校が統合して開校した。開校 8 年目となる今年度は、児童数 448 名、特別支援学級 3 学級を含む全 20 学級である。学校教育目標「志高く、夢（目標）に向かって挑戦し続ける亀ヶ崎の子どもの育成」のもと、教育活動の充実と精選を進め、亀ヶ崎の子どもたちの健全な育成を目指している。

酒田市内では規模が大きい学校のため初任者の配置が続き、本校が初任校という担任が約 4 割となっている。初任者研修などの各種研修や学年主任を中心とした学校研究における学年研究の取組みなど、様々な研修の場を設けてきたが、多様化する教育課題に対応する若手教員の育成が大きな学校課題の一つとなっていた。特に日々の授業を改善することで子どもたちの満足感を高め、担任力の向上を目指す必要性を感じていることから、若手教員の授業力向上を目指して教育マイスター制度を活用している。

2 実践

(1) 運用の方針

児童の「わかった!」「できた!」という達成感を高め、学校が児童にとって魅力ある場所にするためには、学校生活の大半を占める日常の授業を充実させる必要があると考えて次のような実践をした。

- ① 若手教員の学級で、1 学級あたり年間 5 単元（国語・算数）で、担任と教育マイスターによる単元研究を行う。（単元計画表の作成、教材研究の助言など）
- ② 上記の単元では毎時間教育マイスターが授業に入り、TT 指導を行うとともに、授業改善のための助言を行う。
- ③ 各学級の実践の成果やその内容を他の教員に広めることを目的として、教育マイスター通信「Jump Up 通信」を発行する。

(2) 具体的な取組み事例

① 単元デザイン力の育成

単元に入る前に、担任、教育マイスターそれぞれが作成した単元計画表を持ち寄り、打ち合わせをしている。ここでは、探究型学習の視点である「付きたい力を明確にした、自分事となる課題設定」「課題に合ったまとめ・振り返り」

「学びの発展や他教科とのつながり」を中心に話し合いを進めたため、単元の指導に見通しを持って取り組むことができた。

学校研究の窓口である国語科の指導では、単元を貫く課題（単元のゴールとしての言語活動）について、単元のねらいに相応しいものになっているか、教材文の特性に合っているかを吟味した。また、単元導入時に単元末の言語活動の手本（クイズブック、ひみつブック、物語や解説文など）を作成して児童に提示することで、教師が児童のつまづきを予測して手立てを工夫したり、児童が見通しをもって意欲的に取り組んだりすることができた。

② 授業コーディネート力の育成

TT 指導では、時間ごとの学習内容やねらいに応じて支援の在り方を工夫している。



算数の習熟の場面では、特別な支援を要する子や理解に時間がかかる子など個に応じた支援を中心に行うことで、課題を抱える子どもたちが、安心して学習に取り組む姿が見られた。また、多様な考えを引き出す場面では、担任一人では把握しきれない考えを T2 のマイスターが紹介していくことで、児童が様々な視点で考えることの良さを実感し、学びの深まりも見られた。また、学習内容を広げる場面で T1・T2 の役割を交代するなど、効果的な TT 指導を工夫することができた。



授業後には担任と教育マイスターで短時間の振り返りを行うようにし、その時間の成果と課題だけでなく、単元計画の軌道修正や次時の活動への助言など、授業改善に役立つポイントを確認することができた。

③ 実践の成果と課題の共有

各学級の単元研究終了後に、実践の成果を紹介するマイスター通信「Jump Up 通信」を作成して全職員に配付した。「付きたい力を明確にした単元構成の工夫」「単元末の言語活動の工夫」といった単元づくりに関することや、「上位児童を伸ばすための工夫」「UD を生かしたワークシートの工夫」「ICT の効果的な活用」といった授業づくりに関することなど、若手教員の良さや得意分野を紹介することで、自信や達成感につなげることができた。他にもマイスター研修として参加した講演会や他校の授業研究会について情報を提供し、学校研究などに役立てることができた。

学期末には若手教員が実践の成果物などを持ち寄って、成果と課題について話し合う「Jump Up 研修会」を開催している。成果だけでなく日々の授業で悩んでいることや改善したいと考えていることを出し合い、参加者の助言から解決のヒントを学ぶことができた。また、活用させたい言葉、振り返りの視点、ほめ言葉の例といった授業で役立つ掲示物や、単元を通して活用する「学びの足跡シート」など、各担任が工夫して作成した成果物も、若手教員だけでなく様々な学級で活用された。

単元の指導で作成した単元計画表や指導案等はデータを集約し、誰でも自由に使えるようにしている。他にも、板書の写真や子どものノートのコピー、作品やワークシートなどをまとめてファイリングしており、次年度の担任が授業づくりの参考資料として活用することができた。

3 成果 (○) と課題 (△)

- 授業改善に取り組んだ若手教員が、「もっとできるようになりたい」「もっとやってみたい」という児童の意欲的な表情や、課題を抱える児童の大きな成長、学習内容の定着など、児童の姿に大きな達成感を味わうことができた。
- 単元研究を重ねたことにより、単元全体をデザインすることでねらいを明確にした授業ができるようになると実感し、他の単元でも単元計画表を作成して指導に当たるなど、研究の日常化が見られた。
- 職員室で気軽に授業について話し合う姿が見られるようになった。特に、ICT の効果的な活用方法について情報交換したり学び合ったりすることで、学校全体のスキルアップが図られた。
- △ 学校行事などで多忙感が高まると、計画していた通りに単元研究が進まないことがあった。負担感を軽減して臨機応変に取り組むことで、若手教員の研修意欲をさらに高めていきたい。

教育マイスター制度 中学校教育マイスター 校内OJTを推進し、学校研究の日常化につなげる取組み

大江町立大江中学校

1 本校の実態

本校は在校生 170 名、7 学級の小規模校である。学校教育目標「共に生きるために学び気づき実践する大江中生」を具現化するために、目指す生徒像を「お互いの思いを交流し合いながら課題解決を目指す生徒」とし、「学び合いを生かした主体的・協働的な学びの創造～「きく」・「つなぐ」・「もどす」活動を通して～」を学校研究主題としている。昨年度の生徒の姿から、考え表現しようとする姿があること、訊き合う関係があることが成果として挙げられた。その一方で、一部の生徒だけが目標に到達できている状態であること、深く学ぶための力が不足していることが課題として挙げられた。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 授業参観や授業公開、授業づくりについての話合いの場を設定し、助言や意見交換を行う。
- ② 授業づくりに関する様々な情報や研修報告等をまとめた通信を活用して学校研究の日常化を推進し、教員の授業づくりへの意識を高める。

(2) 具体的な取組み事例

教育マイスターを中心に、学校全体で以下の取組みを行った。

① 学力向上に関する取組み

【アクションプランによる共通理解】

全国学力・学習状況調査の分析や県学力等調査、NRTの結果を分析して生徒の実態を把握し、アクションプランに学校全体で共通して取り組むことを明記した。指導の重点について共通理解を図ることができた。

【学期に1回の全校一斉英単語クラスマッチの実施】

学期毎に、全校一斉英単語クラスマッチを行った。一ヶ月前に範囲表を生徒に配付して家庭学習で取り組ませ、テストでは25問の英単語を出題し、クラスの平均点で順位を競った。どのクラスも独自の取組みを行い、意欲的に取り組んだ。次年度以降は、英単語だけではなく、漢字や基本用語の問題などにも取り組んでいきたいと考えている。(図1参照)

【学んだことの定着を図るための、授業と連動した家庭学習の工夫】

「家庭学習の手引き」と「評価規準」を作成し、年度当初と学期初めに教職員、生徒、保護者で共有し、学びの定着を図るために、授業と連動した家庭学習を工夫した。次年度は、自主学習ノートの見本を掲載したより活用しやすい改訂版を作成する予定である。

【定期テスト前の学習会・個別指導】

定期テスト3日前から授業を5時間にし、質問会や講義形式の学習会を行った。3学年では自治会が中心となり、生徒が主体的に学習会を企画し、実施した。

2学期 英語クラスマッチ問題			
R3.12.13 実施			
年 組 番 名前 () 点			
1問 4点×25問 () 点			
1	火曜日	14	溜みあった
2	木曜日	15	忙しい
3	土曜日	16	わくわくした
4	書く	17	のどがかわいた
5	～を比べる	18	緊張して
6	持ってくる	19	人気のある
7	勉強する	20	おもしろい
8	知っている	21	話す
9	飲む	22	楽しむ
10	～を借りる	23	勇敢な
11	美しい	24	空疎な
12	有名な	25	楽しむ
13	とてもおいしい		

満点目指してがんばりましょう!!

図1

【朝自習の使い方の工夫（読書、タブレットを活用した個別最適な学習）】

8：15～8：30の15分間を朝自習の時間とし、月、火、水は読書を行った。読書の本は基本的に図書室の本とし、学校図書館を積極的に利用するようにした。木曜日は学習支援ソフトのミライシードを使った数学の計算ドリル、金曜日は読解ドリルを行った。数学の計算ドリルの場合は取り出しで個別指導も行い、簡単な計算問題を中心に指導して成果を上げた。

② 授業改善に関する取組み

【『授業参観カード』の活用】（図2参照）

教員同士の学び合いを推進するために『授業参観カード』の活用を進めた。1時間の授業全てを参観するのではなく、研究の重点に沿って授業展開の場면을絞って参観することも可とし、気軽にお互いの授業を参観した。また、『授業参観カード』を活用して若手教員を中心に授業を参観し、放課後に、日頃悩んでいることなど授業づくりについての話し合いを行った。

【校内研修、ICT研修の実施】

学校研究について共通理解を図る校内研修を行った。また、ICTの活用に関する校内研修を実施し、授業でのICT活用を推進した。

【研修主任との連携】

研究主任と連携して学校研究に関するアンケートなどを実施し、PDCAサイクルを回しながら学校研究を推進した。

③ 研修内容を還元・活用する取組み

【「研究推進だより」の発行】（図3参照）

「研究推進だより」を発行し、新しい学習評価や自校の課題解決に必要な情報を発信した。

【マイスター研修の学びの還元】

他の中学校の教育マイスターから自校の授業研究会に参加いただいた。事後研究会では各学校の取組みを踏まえた様々な視点で協議が行われ、自校の取組みのよさや課題が明確になった。

④ 小・中連携を推進する取組み

町内の小学校に出向き、5年生の英語の授業に参加した。ALTやAETと話し合う場を設け、日頃の授業について情報交換を行った。

3 成果（○）と課題（△）

- 新しい取組み（全校一斉英単語クラスマッチや授業参観カードの活用等）を計画・実施する中で、生徒の実態に基づいた改善点や新たな取組みへの可能性が見出せた。
- 学校研究の日常化について、教職員の共通理解や意識化を図ることができた。
- △ 学校研究の日常化、確かな学力の育成につながる授業改善のために、『授業参観カード』を活用してお互いの授業を参観する取組みを行ったが、実施期間や実施方法に検討の余地がある。日常の中で気軽に授業を参観し合うことができる環境を整え、同僚性を発揮して学び合える雰囲気をもっと高めたい。

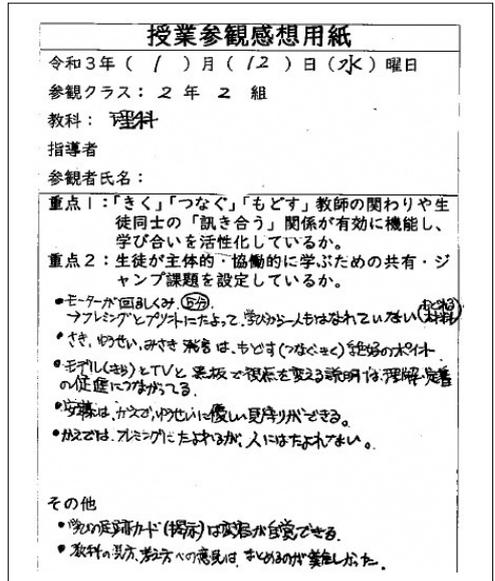


図2

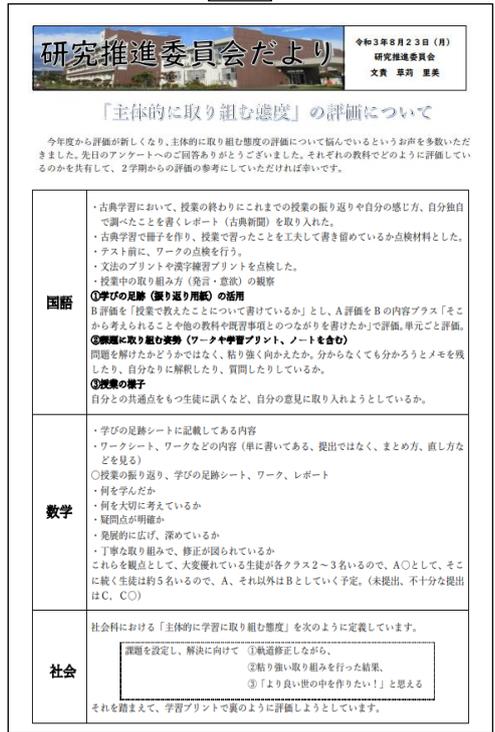


図3